

スウェーデン留学レポート

ウプサラ大学進化生物学研究センター 坪井 助仁

TSUBOI Masahito

キーワード： 長期留学、博士課程、スウェーデン

はじめに

2013年12月6日、私がウプサラ大学で博士課程を始めてから2年と2ヶ月が経ったこの日、私は博士課程の半期を修めた証明である Licentiate と呼ばれる学位の発表会を行った。40分の講演に学外からの審査員との1時間以上に渡る質疑応答を終え、無事 Licentiate を取得した。この2年間ウプサラ大学で学んだ日々を振り返ると、研究で忙しかった事や悩んだことよりも新たな発見に満ちあふれた異文化での経験の新鮮さが思い出される。スウェーデン留学レポートでは、そんな私の2年間の留学生生活を振り返り、留学の利点と欠点について考えたい。本稿がこれから留学を考える学生の参考になれば幸いである。

留学まで

私が海外留学を考え始めたのは大学2年の夏、オーストラリアへ友人と2人で人生初のバックパッキングに行った時だ。当時私はまだ将来の展望の定まらぬごくありふれた若者で、その旅の目的は所謂自分探しだった。アメリカへの留学経験のある両親が幼少期から私に外国での経験を生き生きと伝えてくれていたので、この旅を通じて私も何か将来に繋がるきっかけを見つけられればと思っていた。オーストラリア東海岸、ゴールドコーストは、世界中からのバックパッカーが集まる一人旅の聖地だ。ふらふらと行き先も決めずに宿を点々としながら、相部屋になった客と飲みに出かける。浪人も留年もせずにストレートで大学2年まで進み、テストの成績、就活の準備をいつも頭の片隅に止めざるを得ない人生を歩んでいた私にとって、そんな奔放さは例えようも無く快感であった。このような宛ての無い旅路の中、ある日、私はゴールドコーストの主要都市ケアンズから南へ100kmほどに位置するミッションビーチという小さな町に居た。

その日、私の泊まった宿には10人前後の客が居た。団体客はカナダ人の2人組のみで、彼ら以外はみな一人旅でその日ミッションビーチへ流れ着いた人々であった。バックパッカーの宿には通常キッチンの併設された共同スペースが設けられている。その夜、共同スペースでカナダ人の2人組が他の宿泊客を誘って King' s Cup というゲームを始めた。King' s Cup は一人一人が酒を注いだグラスを持ち、裏向きのトランプを順番にめくる事で進む。それぞれの数字にルールが設定されており、例えば Queen を引けば女性が全員、Jack を引けば男性が全員飲む、といった具合だ。King' s Cup は単純ながら初対面の人間と打ち解けるには最高の仕掛けが随所に盛り込まれたゲームだ。まだまだ英語の拙かった私も、ルールの単純さからゲームに参加する事が出来た。ルールを理解する楽しさに加え、ゲームが進むと酒も進む。次第に一人一人、どのような経緯でその日その場所に辿り着いたのか話始める。年齢、性別、国籍。何から何まで違う彼等の口から出てくるストーリーは本当に面白い。私も拙い英語で動物が好きなこと、その前日、付近でヒクイドリを見た事等を必死に話した。すっかり日も暮れたその日のゴールドコーストは満点の星空

であった。King's Cup でひとしきり笑った後、明るく朝宿を立つ客もいたから思い出に、と、最後は皆で星空を眺めながらそれぞれの旅路を語り合った。その夜の興奮は今でも昨日の事のようにはっきりと憶えている。私は、そんな経験が再びしたいと思った。こうして、私は留学を考え始めたのだ。

その旅からの帰国後、私は留学する方法を探しまわった。交換留学、語学留学、自費留学。探してみれば可能性は様々であった。それぞれの形態に利点と欠点がある。例えば、交換留学や語学留学に代表される短期留学は期間が短いだけに失敗時のリスクは少ない。しかし、長くてもせいぜい1年の期間では、滞在先の文化や人々について学べる事は非常に限られる。オーストラリアでの経験から異なる文化圏に属する人々の有様に深い興味を抱いた私は、最低でも2年は留学したいと考えていた。時期を同じくして、私は行動生態学という学問分野に魅せられた。多くの学問が「もの」を研究対象とするのに対して、行動生態学は「こと」を対象に研究を行う。適応度の枠組みで動物の社会、行動、生活史の進化を見事に説明する行動生態学に、私は大きな可能性と魅力を感じた。外国への長期留学と研究者へのキャリアパス。この2つを同時に満たす最善の方法は外国で学位を取得する事であった。この決断後、渡航先に考えていたスウェーデンへの交換留学を利用して渡航先研究室との面識を作った上で奨学金に応募し、幸運にも採用された。こうして2011年秋、私は北欧最古の名門校、ウプサラ大学で博士課程を始めることになった。

ウプサラ大学の高等教育

ウプサラはスウェーデンの首都ストックホルムの北約70kmに位置する人口約13万人の街である。古くから大学を中心として発展したスウェーデン第4の都市で、1477年創立のウプサラ大学は分類学の父カール・フォン・リンネや温度の単位にその名を残すアンデルス・セルシウスをはじめ、現代科学の礎を築いた数々の巨人達を輩出してきた。今日のウプサラも典型的な大学街で、街の小さなカフェは毎日勉強中の学生達で溢れている。日本で一般的なキャンパスとは違い、ウプサラ大学の施設は町中に点在しており、図書館や自習施設は休日でも利用出来る。大都市ストックホルムのような活気溢れるシティ・ライフはウプサラには無いが、腰を据えて勉学に集中するにはこの上なく快適な環境と言える。私が研究しているのは進化生物学研究センターという、日本で言う理学部に属する研究所である。進化生物学1分野が独立した研究所を持つ大学は世界的に見ても稀で、ウプサラ大学が同分野で世界をリードする立場にあることを端的に示している。

ウプサラ大学の博士課程カリキュラムでは、1年目はコースワークの比重が大きい。私は「科学倫理」、「高等教育者養成コース」の他、現代の生物学者に無くてはならない「自然科学における統計手法」、研究者として避けて通れない論文作成に関する「科学論文の書き方」、男女同権の進んだスウェーデンならではの「科学における男女同権」など、プロの研究者として必要な知識と経験を提供する様々な内容の講義に参加した。全て英語で行われるこれらの講義ではグループワークや長文エッセイが課題となることも多く、語学力も厳しく鍛えられた。また、ウプサラ大学はボローニャプロセスに基づく大学単位互換制度に加盟しており、加盟する大学で開催される講義の単位を卒業単位として認めている。このシステムを利用し、私はノルウェーのベルゲン大学とスペインのバルセロナ大学でも講義を受けた。各分野の専門家から高いレベルの講義を聞けることはもちろん、講義には多様な背景を持つ学生がヨーロッパ中からやってくる。同じ研究の道を志す同年代の学生からは大きな刺激を受けた。このような教育の柔軟性・多様性は、国境を接した多様な文化を擁するヨーロッパならではの教育システムと言える。

ウプサラ大学進化生物学研究センター

進化生物学の中の1分野、行動生態学は適応度、ある生物個体が生きてきた生涯に生んだ次世代の個体のうち繁殖年齢まで成長出来た個体の数、を基本通貨とみなして生物の行動・形態・生活史の進化の解明を目指す分野である。ウプサラ大学進化生物学研究センター（Evolutionary Biology Center、以下 EBC とする）は行動生態学の伝統が極めて強く、本分野の花形のテーマとも言える性淘汰や性的対立の実証研究においては今日も世界中から一流の研究者が集まって日々研究活動を行っている。およそ半月に一回程度の間隔で行われる招待講演にはヨーロッパ内に限らず北米、オーストラリアから講演者が集まる。内容は多岐に渡り、私には全く分野外の講演もしばしばあるが、一流の研究者の仕事に触れ、巧みなプレゼン技術を観察するのは貴重な経験だ。

活発なソーシャルイベントも EBC の魅力だ。毎週月曜日の朝は Fika と呼ばれるスウェーデン式ティータイムの時間で、博士課程の学生、ポスドク、あるいは教員の一人が研究室全員分のケーキを準備して振る舞うことになっている。週明け一番の朝は誰もが重い足取りで仕事へやってくるものであるが、このケーキを楽しみに皆やってくる。毎週出席率はほぼ 100% である。また、EBC 全体で数ヶ月に 1 度開催される EBC Pub では EBC の研究室全てが集まり、酒を飲む。研究の進捗状況が芳しくない時こそ、同僚の研究者と酒を片手に話し合うべき。これがスウェーデン流問題解決法だ。私は嘗て、仕事がうまく行ってもいないうちから遊ぶなどもってのほか、と考えていた。しかし、人間は仕事のために生きているのでは必ずしも無い。家族のため、お金のため、理由は人それぞれであろうが、多様な社会環境の中で必要に応じて仕事をしているというのが実際のところであろう。だからこそ、うまく行かない時には心に余裕を作って、何が自分を苦しめているのかよく考えるべきだ。EBC は極めて生産的な研究所であるが、平日の午後 5 時以降と週末に研究室へ来る研究者はほとんど居ない。その秘密はこわばった研究者の心をほぐす数々のソーシャルイベントにあるのだ。

格式高い学位審査会もウプサラ大学での研究生生活を引き締める重要なスパイスである。博士号の審査では申請した学位論文の研究内容における専門家を国外から招待し、時には 3 時間以上にも及ぶ質疑応答を大勢の聴衆を前に行う。入念にアイデアを練れる論文や学会発表だけでは決して表に出ない研究者としての「質」がこの 3 時間の質疑応答で暴かれるのだ。私は何度もこの博士論文審査会に出席し、知と知のぶつかりが最高潮に達する興奮すべき瞬間を目の当たりにした。審査会で学位授与を却下された例は大学の歴史でも数えられる程しか無いという。しかし、質疑応答の質は噂となり瞬く間に広まる。博士論文審査会で繰り広げられる知と知の争いは、目には見えない大敗北となることも十分にあり得る厳しい試練なのだ。先日、私は博士課程の半期を終えた証明である Licentiate という学位の審査会を行った。博士課程の審査会程の重要性はないが、それでも質疑応答はみっちり一時間。幸い、私の質疑応答の様子は非常に好評であった。私自身、質疑応答前は緊張で震えていたが、議論が活発化するにつれて次々とアイデアが溢れ、審査員のアイデアとぶつかり合って更に新しいアイデアへと昇華されるのを感じていたので、個人的にも上々の手応えであった。

このように、研究所の豊富な資源、適度な息抜き、そして格式高い伝統が全て生産性に結びついた進化生物学研究センターでの研究生生活は極めて充実している。この調子で残りの 2 年間も研究を続けて行きたい。

スウェーデンでの長期留学を振り返って

前述の通り、私はこの2年間の研究生活はこれ以上無いほど充実していたが、2年間の外国生活を振り返ると、長期留学の欠点についても思う事があったので最後にこれを述べたい。長期留学を行うとなると、留学準備に必要な労力と留学費用両面から考えて20代後半に行うことが一般的となると思うが、この20代後半は、キャリアアップに極めて重要な時期であると同時に、将来家庭を築くパートナーを探すためにも重要な時期である。キャリアアップの観点から言うと、長期国外生活が単純なディスアドバンテージとなることは考えにくい。なぜなら、新卒採用を優先する企業への就職が難しくなるデメリットと同時に、英語圏にある関連分野のあらゆる就職先が候補となるメリットがあるからだ。ただし、日本の関連分野との関係が疎遠となることで、間接的に帰国後の就職が難しくなる可能性はある。留学中も定期的に日本へのアンテナを広げる等で挽回する必要があるだろう。他方、パートナー探しの問題も重要な問題であり、文化・母国語の違う相手と家庭を築くのは容易なことではないので、長期留学を考える上で家族計画はまず念頭に置く必要がある。しかし、これらの潜在的欠点を含めても長期留学には多大なメリットがあると私は思っている。世界経済が困窮し、国際関係が冷え込む昨今、私は国際経験を持った人物がこれまで以上に必要とされるであろうと思う。それは、客観的に事実を判断して議論を行う能力、自己を批判する強さといった、国際社会での舵取りに不可欠な資質は、母国の当たり前が全く通用しない異文化で荒波にもまれて始めて培われるからだ。2005年の夏、私を留学へと奮い立たせたオーストラリアでの経験には、どれほど困難が立ちまじらうと、それを乗り越えるだけの一縷の希望の光があった。それをどう実現できるか私にもまだ解らないが、スウェーデンでがむしゃらに学問と向き合う中で時折見える文化を超えた好奇心・情熱・友情の糸はその希望の光に続いていると私は確信している。

最後に、ウプサラ大学での充実した研究生活が実現したのは、私の研究者としての人生を応援してくれた家族と友人のお陰である。学部・修士課程を修めた京都大学農学研究科昆虫生態学研究室の先生方・先輩方には、行動生態学の面白さ、研究に対する基本的姿勢をご指導頂き、学問の道へと私を導いて頂いた。そして、私の留学はJASSOの奨学金による経済的支援があって実現した。これら全ての人々・団体に、改めて深く心より感謝申し上げたい。



写真：町のシンボル、ウプサラ大聖堂